

平成 30 年度 第 5 回 観察会 記録

日 時	平成 30 年 8 月 2 日（木）～5 日（日）
観察地	宮崎県椎葉村・高千穂町
講 師	コーディネーター 田中 克先生 椎葉村 焼畑 椎葉 勝先生 久山喜久雄先生 他
テーマ	焼畑農業に見る森里海のつながり
備 考	参加者 25 名（田中克先生 スタッフ渡邊、上山、飯田含む）、記録 飯田（注）

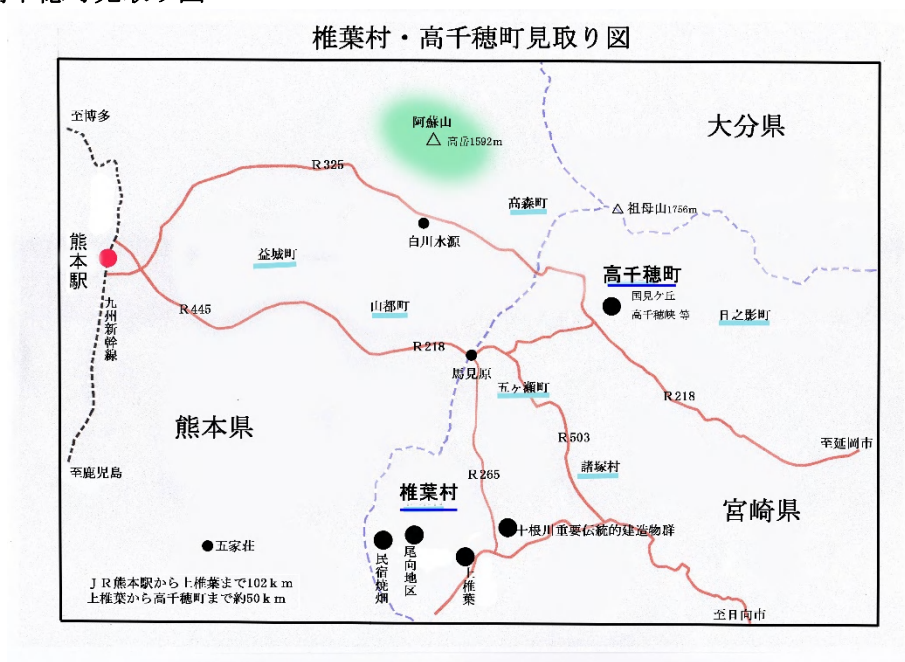
本観察会の大きな関心事の一つは椎葉村の焼畑で火入れを見ることであったが、台風 12 号による雨のため延期になり、2 日目のプログラムは粒々飯々での体験プログラムを実施した。

(注) 本記録の写真は渡邊、上山、飯田が撮影、飯田が編集した。

1. 行程： 凡例： 新幹線 ++++ バス === 徒歩 ***

1日目 (8/2)	さくら547号新大阪発8:04 ++++ 熊本駅着11:17 === 上椎葉着14:15 === 焼畑現地見 === 民宿着17:30頃(泊) (注) 民宿は「おまえ」と「紅葉屋」に宿
2日目 (8/3)	民宿出発8:30 === 民宿焼畑 *** 焼畑火入れ・昼食・ソバ撒き *** 粒粒飯飯でなおい(懇親会 17:30頃まで) === 民宿(泊) (注) 天候により火入れが出来ず延期の場合、午前中、椎葉 勝氏の講話・ソバ打ち体験等 午後、尾向地区に移動し、尾前一日出氏の里山事業・ツリーハウス・古民家見学等を見学
3日目 (8/4)	民宿出発8:30 === 上椎葉見学(歴史資料館など)・昼食 === 十根川重要伝統的建造物群見学 == = 高千穂町道の駅 === 国見ヶ丘 === 高千穂神社 === ホテルグレートフル高千穂17:30着*** 夕食(天庵18:00~19:00) *** 高千穂神社・夜神楽鑑賞(20:00~21:00) *** ホテル21:15(泊)
4日目 (8/5)	ホテル出発8:30 === 高千穂峡 === 天の岩戸神社・天安河原 === 世界農業遺産見学 === がまだせ市場着11:20(昼食「和」11:30~12:20)・出発12:30 === 熊本駅着15:00 さくら564号出発15:35 ++++ 新大阪駅着18:48 解散

2. 椎葉村・高千穂町見取り図



3. 第 1 日目：8 月 2 日（木）晴れ

- (1) 新幹線さくら 547 号は予定どおりの時刻に熊本駅に到着し、田中先生と合流。駅前から南阿蘇交通バスに乗車、車中で観察会への期待を全員に披露していただいた。期待の焼畑火入れは、台風 12 号の影響で椎葉村が雨天続きのため延期になったが、それ以上の収穫を得ることを願いつつ椎葉村へ向かう。



- (2) 道の駅「通潤橋」にて

- ① 熊本駅を出発し約 70 分経過。山都町の「道の駅・通潤橋」にて小休憩。ここから「通潤橋」が正面に見えた。放水の様子を写真で見たことがあるが、おもいかげず実物に遭遇できラッキー。「通潤橋は、石造単アーチ橋で、江戸時代の嘉永 7 年（1854）に阿蘇の外輪山の南側の五老ヶ滝川（緑川水系）の谷に架けられた水路橋で、水利に恵まれなかった白糸台地へ通水するための用水路。石造単アーチ橋で、橋長は 78 メートル、幅員は 6.3 メートル、高さ 20 メートル余で、橋の上部には 3 本の石管が通っている。肥後の石工の技術レベルの高さを証明する歴史的建造物で、国の重要文化財、農林水産省の疏水百選に選定されている。」（道の駅パンフレットから）

- ② 八朔祭の造り物・美女と野獣

道の駅の広場の造り物が目を引いた。町の人々が田の神様に感謝して、八朔（旧暦 8 月 1 日）に豊年祈願と商売繁盛を願う祭が開かれ、竹や杉、シュロの皮など町に自生する植物を材料にして作る「大造り物」で、一年間展示するとのこと。面白い造りものでした。



通潤橋



放水時（イメージ）

- (3) 上椎葉へ到着

熊本から約 2 時間 30 分で上椎葉へ到着。上椎葉から小型バス 2 台に分乗し、不土野向山の民宿焼畑へ向かう。到着まで約 1 時間半。



小型バス：諸塚リース（左）と椎葉レンタカー（右）



大造り物：美女と野獣（避暑と移住に町に来てほしい）
松かさ、シュロなどでつくられている。

(4) 民宿焼畑へ：上椎葉から椎葉ダム沿いの狭い道を民宿焼畑めざしバスは行く。



上椎葉から民宿焼畑まで細い山道に行く



民宿焼畑へ到着、椎葉勝さん出迎え。



(5) 火入れの山を見に行く：民宿焼畑から小型バスで5分程山道を走り、今年火入れする山を見学



今年の焼畑区画遠望・道路を挟み上下2段あり



杉を伐採し、枝を乾燥させ火入れを待つ



神様の木（1本だけ残す）



伐採杉の切り株は温室栽培のボイラー燃料に



各年次ごとの焼畑の森への成長の状況が分かる

椎葉勝さんのお話（概要）

- ① 今年焼くエリアは勝さんの父君が30数年前に植林した杉林で、面積0.35ha。1本だけ伐り残した木は神の依り代。神饌を供え火入れの無事を願う神事を執り行う。火入れは風向きにもよるが山の斜面の上からつけはじめ、3分の2くらい焼けると、下から迎え火をいれる。こうすると途中で火と火が合わさり自然に消える。この時消える前の炎は上昇気流に乗って壮観な光景になる。
- ② 火入れのあと、まだ地面が熱い間にソバの種を撒き75日目に収穫する。翌年はヒエ、アワ、3年目はアズキ、ダイズを撒く。その間肥料も水もやらず自然に任せる。その後20年ほど放置して森が再生するのを待つ。究極の自然農法と自負している。

- ③ 森にはイノシシの好物のクリを 6000 本植えた。お陰で里にイノシシが出てこなくなり、イノシシ肉もおいしくなった。サクラ、クヌギ、シデ、ミズキなど根の張る落葉広葉樹を植え、山の保水力を高め、山の再生につなげたい。」

台風 12 号の雨で火入れが延期され残念でしたが、来年こそきっと・・・・。

火入れの山で見た花



ゲンノショウコ



ヤマジノホトトギス



タケニグサ

(6) 焼畑粒々飯々にて

帰りは徒歩で下山、約 15 分で体験・交流施設「焼畑粒々飯々」へ到着。ログハウスの前に大漁旗が翻り椎葉勝さんの信条「山から海を思う」を象徴する光景でした。

平成 20 年、椎葉勝さんを代表に「焼畑蕎麦苦楽部」を立ち上げ、22 年には体験・交流施設「焼畑粒々飯々」を開設。中に神棚、一枚板のテーブル 3 基と厨房設備を備え、昔使っていた農作業具などが展示されていました。窯は薪で炊き、水は山の湧水を使用、冷たい水がとてもおいしく、しかも無料とのこと。外壁に椎葉・向山地区の言葉が標準語と対比して掲示されているのも、面白く思いました。

火入れの後の直会（なおらい）はここで行われ、満員の盛況とのこと。



大漁旗がお出迎え



粒々飯々のログハウス



椎葉勝さんとみちよ夫人



粒々飯々スタッフの皆さん



懐かしい農作業の機械や道具類を展示



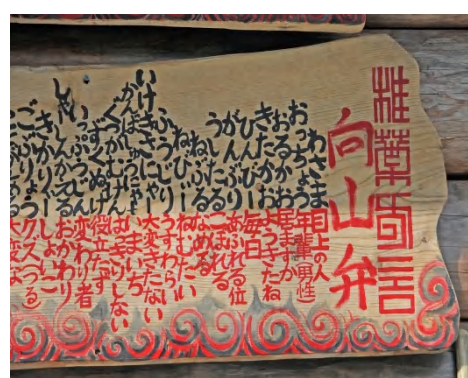
窯は薪で



ピザ焼きの窯



椎葉方言 向山弁



同 部分

(7) 民宿にて

民宿おまえに 1 2 名、民宿紅葉屋に 1 3 名が宿泊。夕食の席に椎葉勝さん、久山先生、尾前翔平さんを迎え、にぎやかな夕食会になりました。

民宿おまえではミサ子おばあちゃんに正調ひえつき節を披露していただきました。普段聞きなれているひえつき節とは歌詞もメロディーも異なるもので、集落ごとにバリエーションが数多くあるとのことでした。



民宿おまえ



民宿紅葉屋



ごちそう



田中先生のスピーチ、



久山先生と椎葉勝さん



尾前翔平さん



左：正調ひえつきぶしを披露中の民宿おまえのミサ子おばあちゃん

4. 2日目：8月3日（金）晴れ

（1）火入れ場の草刈と粒々飯々での体験教室

焼畑の火入れは台風12号の雨で延期のため2グループに別れ、1班は火入れ場の下草刈、2班は粒々飯々でソバ打ち、ピザ焼きなどを体験。

- 1) 草刈り：火入れの火勢を弱らせないため、草刈り鎌でクズなどを刈り取る。刈っても1週間もすれば元に戻り、火入れまでに数回行うとのこと。勾配きつく足場の悪い斜面で、下から上へと刈っていくきつい作業でした。立木伐採後も火入れまでに行う作業がいろいろとあることを知り、改めて焼畑農業の大変さを認識。



2) ソバ打ち：



3) あくまき：灰汁（あく）を利用した椎葉村の伝統保存食の餅 作り方

- ① 洗って一晩水につけたもち米の水をきり、孟宗竹の皮にひとカップずつくらい包み、細かく割いた竹の皮のひもで2～3箇所しばる。
- ② 大きな鍋に並べてから、かぶるくらいの灰汁を入れ、膨らんで弾力が出るくらいまで煮る。

- ③ それを鍋から取り出し、皮をはいで、食べたい分だけ切り分け、黒砂糖の粉末やきなこをつけて食べる。⇒ 食べた印象：どこかで食べたような、懐かしい感じがしました。



4) ピザ焼き：生地を山菜をトッピング。オリーブ油をかけて焼く。



ウド、タラの芽など森の恵みを存分に生かしたピザが焼きあがりました。



5) 昨年火入れ跡の見学

粒々飯々に隣接して昨年火入れした焼畑があり、火入れ後1年経過した様子を見学。



上写真左の木は昨年火入れをするときの神様の木で、根元にお神酒などのお供えものがありました。1年たつと一面草木で地面が覆われ、そのなかにヒエ、アワ、キビが栽培されていました。ソバの花が咲いていたが、昨年のこぼれ種子によるもので、結実はしないとのこと。

6) お昼のごちそうができました。ソバ、あくまき、ピザ、漬物、ご飯どれもおいしくいただきました。



お昼ご飯をおいしくいただいたあと
勝さんはじめスタッフの皆さんにお礼を
のべ、午後の訪問先の尾前一日出さんの
事務所に向け、出発した。

7) 尾前一日出さんの里山事業

尾前さんは 1960 年椎葉村生れ。建築設計事務所に勤め設計の腕を磨いてきた。42 才のとき、子供たちをのびのび育てたいとふるさとに戻った。

① 事務所にて

所内のあちこちに奇抜な設計が施されており、最初に歓声があがったのがトイレ。前方に視界を遮るものが何もなく、緑の山が迫ってる。風が強いときや雨のときはスライド式のガラス戸を引く。解放感にあふれたトイレでした。お風呂は五右衛門風呂、上階へは丸木に足掛かりを付けただけの梯子、天井からロープや、屋根から庭へ滑り降りる竹の滑り台、建屋も外壁がなく、台風や大雨のときはブルーシートを張るようにしているとか。氏は一級建築士、すべてに常識を超えた、遊び心いっぱいの設計でした。(写真左から解放トイレ、梯子段、五右衛門風呂、竹の滑り台)



② ツリーハウス、ジップライン

事務所の裏山に案内され、見たものは20m以上あるモミの巨木を利用してつくられたたれたツリーハウス。「椎葉のトム・ソーヤー」と言われる氏は「大人も子供も楽しめる遊び場を作りたい」と、仲間の協力を得て今までに5基製作、1基の製作費は材料費だけでおよそ200万円ほど必要とのこと。参加者の多くが梯子を上り降りするスリルとツリーハウスからの景観を楽しみました。

木々の間に張られたワイヤーロープをプーリーと呼ばれる滑車を使って滑り降りるジップラインも数人が楽しみ、さらに2基目を製作中とのこと。このような設備をつくる目的は、子供たちに自然の中でのびのびと遊び成長してほしい、危険なものから子供を遠ざけるのではなく、子供自身が考え行動する場を提供することが私の使命だとのこと。

実現には多くの仲間の協力と資金が必要であるが、資金は自分のいのちが尽きるとき借金がなければいいと割り切っているとのこと。尾前哲学ともいえるべきお話でした。



③ 古民家の再生

村内の古民家の再生や十根川伝統的建造物群の保存活動など多岐にわたり活動を展開されているとのこと。今後の活躍を祈念しお別れした。

8) 椎葉クニ子さんにお会いした

尾前一日出事務所を辞し、民宿焼畑にてクニ子おばあちゃんと面会した。九十二歳になるという彼女は、歩くとき杖は不要で、言語明瞭、記憶もしっかり。最近では山の作業は自粛しているとのこと。長年夫の秀行さんや息子の勝さんとともに焼畑を守ってきた自負、誇りが感じられるお話を沢山お聞きしたあと皆で記念写真を撮影。クニ子おばあちゃんの健康と、ひ孫が44名という椎葉家のますますの繁栄を祈念し、また再会を願いお別れした。

民宿焼畑に隣接して椎葉家の氏神様・向山神社（旧称は白鳥権現とところ）と巨大な「壺の杉」がある。久山先生の案内で見学。久山先生と民宿焼畑にお別れした。



椎葉クニ子さん



クニ子さんと懇談

5. 3日目：8月4日（土）晴れ

（1）椎葉ダム

民宿を出発後、椎葉ダムサイトにある「女神の像」のある公園で下車、椎葉ダムを見学した。このダムは昭和30年5月、105名の尊い犠牲のもとに完成した日本初のアーチ式ダムで最大出力93,200KW。殉職者の霊を慰める「女神の像」が建立されている。吉川英治はこのダム湖を「日向椎葉湖」と名付けたとのこと。



（2）上椎葉にて

駐車場にて椎葉村観光協会職員 椎葉 奈木沙さん、ガイドの高島清行さんと合流した。

1）椎葉民俗芸能博物館

当館は平成9年4月にオープン、椎葉村の歴史、自然、民俗文化を紹介しており、高島ガイドの解説で見学した。

- ① 椎葉の歴史：古代から近世の椎葉村の歴史概観
- ② 平家伝説と史跡
- ③ 一年の暮らし（春・夏・秋・冬）と祈り：季節ごとの行事と神への祈り、民俗を紹介



明治42年に椎葉村を訪れた柳田國男は、民俗学関係では初めての書として「後狩詞記」を著した。椎葉村近代の山村生活の様子を知る貴重な資料集として高い評価をうけているとのこと。興味深い展示が多くあり、再訪してゆっくり見学したい素敵な博物館でした。

2）椎葉厳島神社

椎葉厳島神社は、源氏方の武将と平氏遺臣の娘との悲恋物語で有名な那須家住宅（鶴富屋敷）の近くにあり、壇ノ浦の戦いに破れた平氏の残党が山間の僻地であった当地へ逃れて隠れ住み、元久元年（1204年）に一門の氏神である安芸国厳島社を勧請したものと伝える。明治4年（1871年）に現社名に改称し、また明治6年に39の集落が合併されて現椎葉村が出来た関係で、各集落に鎮座していた神社を合祀したという。見学した日、社殿の前に「茅の輪」が設置され、作法に従って茅の輪をくぐり参拝しました。



3）鶴富屋敷

平家落人の伝説と共に古い歴史をもつと伝えられる那須家住宅は、日本の民家としては極めて重要なものとして昭和31年6月28日に重要文化財に指定された。

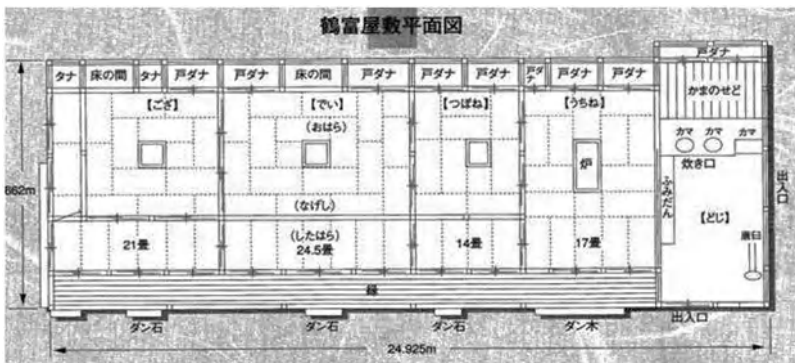
構造は桁行（一棟の家の長さ）約25m 奥行約8.6mで 形式は一重寄棟造り、茅葺屋根。

椎葉村の民家はすべて同じ形式（椎葉型民家）で、この家はその代表的なものとのこと。

間取りは部屋を一行に横に並べた形式で向かって左より、こぎ、でい、つぼね、うちねの四室が並び、その右にとじ（土間）がある。各室は前面を「したはら（広縁）」、内部を「おはら」といい、背面にはすべて戸棚を造り付けにしている。

民家としては規模が大きく、しかも太い材料を用いた本格的な構造を持ち、特有の美しさがあ

る。屋根は寄棟造りで茅葺であったが、昭和 38 年に銅板で茅の上から被覆したとのこと。
この邸宅は通称「鶴富屋敷」といい、平家落人の伝説と共に古い歴史をもつと伝えられる。



隣接の鶴富旅館で昼食は「鶴富御膳」。

午後、十根川重要伝統的建造物群保存地区を見学のため十根川へ向かう。十根川駐車場にて、8月2日から4日まで椎葉村内を小型バスで移送していただいた椎葉レンタカーの甲斐さん（右写真左）、諸塚リースの黒木さん（同右）とお別れ。3日間ありがとうございました。



4) 十根川神社の八村杉と重要伝統的建造物群保存地区

十根川神社境内の八村杉は国指定天然記念物だけあって、見事なものであった。樹高 54.5m（国内 2 番目）、幹周り 19m（国内 4 番目）という。元久年間に椎葉を訪れた那須大八郎が手植したとの伝説のある杉で、見ごたえのある巨木でした。

この地区は「椎葉型」といわれる独特の建築様式の民家と隣接する馬屋・倉、石垣が樹木林と調和し、歴史的景観を保持していることから、平成 10 年 12 月 25 日に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。地区の面積は約 40 ヘクタール、選定当時の地域の戸数は 17 戸で人口 90 人であった。

椎葉村は、日本の貴重な文化遺産である歴史的町並みの保存と活用に積極的に取り組み、建築設計者の尾前一日出さんは一時設計事務所を置いていたとのこと。

また、空家 1 軒を村が買い上げ、青少年の宿泊研修施設として利用しているとのこと。

2 : 30 ごろ見学を終え、椎葉村観光ガイドの高島さんとお別れした。



十根川神社と八村杉



十根川重要伝統的建造物群保存地区



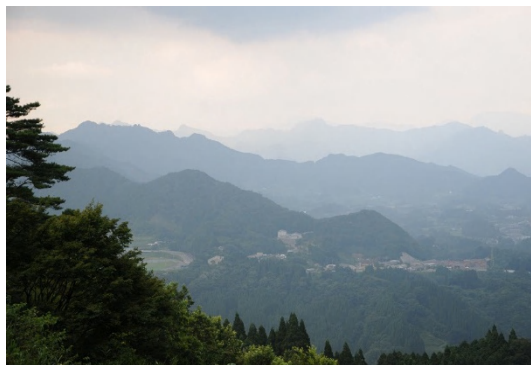
ガイドの高島さんとお別れ

5) 高千穂町国見ヶ丘

南阿蘇交通バスに乗り換え高千穂町へ向かう。道の駅高千穂で観光協会・佐藤幸子さんと合流、国見ヶ丘へ。高千穂は天孫降臨の地と伝えられ、眺望のよい国見ヶ丘から降臨の地を眺めた。高千穂は周囲を山々に囲まれ風光明媚で、神々のお気に召される土地とはこのような所かと納得。残念ながら国見ヶ丘で佐藤ガイドに説明をしてもらっているとき雷鳴とともに雨が降り出し、早々に切り上げ高千穂神社に向かった。



ガイドの佐藤さん



国見ヶ丘からの展望。秋は雲海が美しいという



天孫降臨の像



秋には右のような雲海が見えますよ！



雲海（イメージ）

6) 高千穂神社

高千穂町は神話に彩られた町で、神話にまつわる多くの施設があり、高千穂神社もその一つ。古事記・日本書紀に記されている「高千穂宮」の名称を継ぐ神社で、神代の昔、高千穂郷を荒らし回っていた鬼八を退治した三毛入野命（みけいりののみこと・神武天皇の兄）を首座にお祀りし、高千穂郷八十八社の総社として「十社さん」と呼ばれて親しまれ、崇められる存在とのこと。五間社流れ造の本殿は江戸時代の造営で、国の重要有形文化財。夕暮れに、雨に煙る社殿や森は厳かな雰囲気包まれ、なかなかよい感じでした。



雨中でガイドする佐藤さん



高千穂神社



左：鎮め石
第十一代垂仁天皇の勅命で当宮が建立されたときに用いられた鎮石と伝えられ、手をかざすと心持温かく、人の悩みや世の乱れが鎮められるという。

左：三毛入野命が喜八を退治している様子の像が社殿に展示されている。
右：神楽殿。しめ縄は七五三縄。



7) 夕ご飯：高千穂町天庵にて

全員がそろって夕ご飯をいただくのは今夜がはじめて。ソバ処「天庵」で少し贅沢なソバ会席料理を楽しみました。ソバだけでなく、造り、天ぷら、高千穂牛の焼き肉など。堪能しました。



天庵



皿の左はそばでエビを絡めた天ぷら



ごちそうの数々



やけ具合はどうか？

7) 高千穂神社の夜神楽

天庵で食事を終え、再び高千穂神社。7時過ぎに神楽殿に着き、舞台に近い席を確保。8時からの上演演目は ①手力雄の舞 ②鉦女の舞 ③戸取りの舞 ④御神躰の舞。

①～③は天の岩戸神話にまつわる舞、④はイザナギ、イザナミの二神が酒をつくり、お互いに仲良く飲んで抱擁しあい、夫婦円満の大切なことをあらわし、二神の客席でのアドリブ(?)に客席が大いに沸いた1時間でした。(お断わり：神楽の演技はフラッシュ撮影ができず、下の写真は高千穂観光協会のホームページから借用した)



手力雄の舞



鉦女の舞



御神躰の舞

そもそも神楽とは何か？ 広辞苑によると、「神座＝かむくら」が転じたで、かむくら→かんでら→かぐらに変化していったという。

日本の信仰の始まりは、縄文時代まで遡り、その時代の遺物から自然崇拝や呪術を重視していた古の暮らしを垣間見ることができる。神が自然や事物に降臨し、鎮座するという観念が明確になると、神が降臨した際に身を宿す「依り代」としての巨石や樹木、太陽が昇り沈む聖域である高い峰を祭祀の対象物とし、やがて、人の手が加えられた神座が設けられるようになり、神座に神を迎え祭祀を行うようになったとのこと。古事記・日本書紀の岩戸隠れの段でアメノウズメが神懸りして舞った舞いが神楽の起源とされる。

高千穂神社の夜神楽は15の保存会が毎夜交代で奉納、保存会により演技に特色があるという。私達が鑑賞したのは、連日休みなく行われる観光用の神楽であるが、椎葉村、高千穂の各集落に伝わる神事としての神楽をいつか見たいと思う。

3日目の予定はこれで終わり、ホテルグレイトフル高千穂に帰り就寝。

6. 4日目：8月5日（日） 晴れ

（1）ホテルからの景観

早朝 5 時半ごろ、川霧が立ち幻想的な景色。



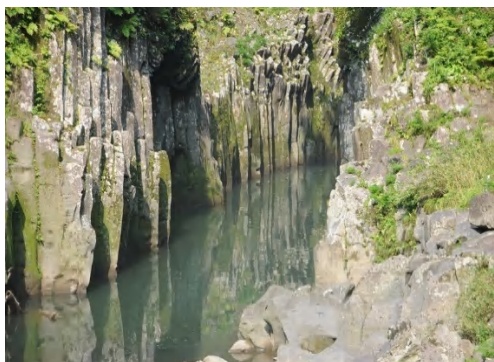
（2）高千穂峡

高千穂峡は、高千穂町の五ヶ瀬川にかかる峡谷で、国の名勝、天然記念物。佐藤ガイドの案内で高千穂峡を散策した。そもそも高千穂峡はどのようにしてできたのか？

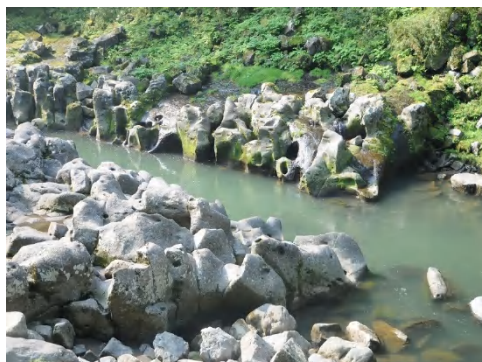
大噴火による阿蘇カルデラをつくった火山活動によって、約 12 万年前と約 9 万年前の 2 回に噴出した高温の火砕流が、当時の五ヶ瀬川の峡谷沿いに厚く流れ下った。この火砕流堆積物が冷却固結し溶結凝灰岩となり、柱状節理が生じた（写真①）。溶結凝灰岩は磨食を受けやすいため、五ヶ瀬川の浸食によって再び V 字峡谷となったものが高千穂峡である。高さ 80～100m にも達する断崖が 7km にわたり続いており、これを総称して五ヶ瀬川峡谷（高千穂峡）と呼ぶ。

岩盤でできた川床に出来た円筒形の深い穴を甕穴といい。川床の岩盤のくぼみや割れ目に、渦巻きができそのエネルギーで穴ができ、そこへ小石が入り渦巻きで岩盤を削り深い円筒形の穴ができるとのこと。

高千穂峡最大の景観は真名井の滝。高千穂峡の川幅が狭まった部分に流れ落ちる滝で、日本の滝百選の一つ。峡谷の崖上は自然公園となっており、その中にある「おのころ池」より流れ落ちる水が真名井の滝となっている。ボートから見る滝は迫力があるが、乗るには数時間の待ち時間が必要とのこと。



柱状節理



甕穴



真名井の滝

3) 天岩戸神社西本宮

神職の案内で、天照大御神がお隠れになったと伝えられる天岩屋戸をご神体とする拝殿のみ神職の案内で拝殿の裏から天岩屋を遥拝。撮影禁止とのこと、写真はなし。

(4) 天安河原

天照大御神の天岩屋戸隠れで困り果てた八百万の神々が集り、相談（神議）したところだそうで、小石を積むとご利益があり、パワースポットとして人気があるという。



(5) 棚田

高千穂町や日之影町などには美しい棚田が広がり、日本の棚田100選に7か所が選ばれている。この地域は、河川が溪谷状で農地との高低差が大きく、水の確保が困難な時代が長く続いた。明治時代になり、山の奥地に水源を求め、血のにじむような努力と多額の私財を投じ、延長17kmに及ぶ「岩川用水」が着工から9年後に完成した。この通水を経て、地域の人々の暮らしは一変、以前、小川の周辺にわずか8反ほどの水田があったのみであったが、用水路ができたおかげで120町(約150倍)まで広がったといわれている。総延長500km以上の水路網は、険しい山肌を縫うように作られたので「山腹水路」とよばれ、今は1800haの水田を潤す。山の斜面を流れる水を受け止め山腹崩壊を防ぐ役割もあるとのこと。



山腹水路



高千穂町の棚田とアマテラス鉄道の鉄橋

(6) がまだせ市場

昼食は高千穂町ガマダセ市場内のレストラン「和」で高千穂牛ステーキ。ちなみに、“がまだせ”とは「頑張れ」の意。

高千穂町でのプログラムを作ってもらい、諸手続きやガイドをしていただくなど、大変お世話になった佐藤さんとここでお別れした。

(7) 熊本大地震の爪痕

ガマダセ市場から南阿蘇交通バスにて J R 熊本駅に向かう。
阿蘇山麓の国道 325 号線を走り、熊本大地震の爪痕を車中から見た。
阿蘇大橋は、熊本県阿蘇郡 南阿蘇村立野と南阿蘇村河陽字 黒川の国道 325 号線黒川を跨ぐところに架橋されていた橋で、
国道 57 号から分岐した所にあるアーチ型が特徴の橋だったが、
2016 年 4 月 16 日の熊本大地震で橋の直下の断層が動き、
橋脚を支える地盤がずれたことにより崩落した。2020 年度を目途にコンクリート橋として
復旧される予定で大工事中であった。車中から山の崩落、復旧工事の様子を垣間見て、
一日も早い復興を祈った



阿蘇大橋復旧工事

【終わりに】

バスは予定の時刻に J R 熊本駅に到着、新幹線さくら 564 号で新大阪へ。毎日酷暑でしたが、だれも熱中症にもならず事故もなく元気に帰阪。企画とご指導をいただいた田中克先生、また参加者の皆様のご協力に感謝申し上げます。

スタッフ：渡邊啓子、上山富美代、飯田正恒